

2025 年度第 1 回入学試験問題

国語

「始め」の合図があるまでは問題を見てはいけません。

注 意

- 1 「始め」という合図で始め、「やめ」という合図で、すぐに鉛筆をおきなさい。
- 2 問題は 1 ページから 7 ページまでです。
- 3 解答用紙は問題冊子には含まれていません。
- 4 初めに、解答用紙に受験番号・氏名を記入しなさい。
- 5 答はすべて解答用紙に記入しなさい。
- 6 字数制限のある問題については、かつこ・句読点も一字と数えなさい。
- 7 文字は楷書<sup>かいしょ</sup>で、一点一画でいねいに書きなさい。
- 8 質問や用があるときは静かに手をあげなさい。

「三津子は二児の母親で、子育てについてブログで連載していた。そのブログの読者が亜希と茗子である。亜希は一児の母親、派遣会社の育休を取得中でありながら求職中、茗子は会社員で結婚しているが子はいない。ブログの連載が停止したことをきっかけに、三人がホテルの小料理屋で偶然、席を一緒にすることになった。次に続く文章を読んで後の間に答えなさい。」

「そうだね」と、三津子さんが呟いた。「私もそれは嫌だな」と、顔をしかめる。

亜希さんが茗子越しに、三津子さんに向かって頷く。その後「でも」と言っ  
てから、しばらく宙を仰ぐような仕種をした。自分の気持ちを確かめているよ  
うに思えた。そしてまた、茗子に顔を戻した。

「でも、それでも『迷惑』はダメだと思います。私も妊娠、出産したから、『迷  
惑』なんて言われたら、つらいです」

「何言ってるの？ どういうことですか？」

亜希さんの言葉に、体がカッと熱くなり、茗子は大きな声を上げた。

カウンターの向こうで板前が、はつきりと茗子の様子を窺ったことがわかっ  
た。それでも冷静にはなれなかった。

「何を言ってるんですか？ どうしてまだ、そんなことを言うの？」

今度は何とか声の音量は抑えたが、代わりに語尾が震えた。体温がどんど  
上昇していく。

「私、迷惑って言ってしまったことは反省してるって、言いましたよね？ 前  
野さんにも、ちゃんと謝罪してるし。なのに、どうして」

どうして二年以上も前の過ちを、謝罪までしたのに、今また責められなけれ  
ばいけないのか。しかも、その件とは無関係の人に。今日会ったばかりの人に。

亜希さんは返事をしない。しかし怯むことなく、真っ直ぐに茗子を見つめ続  
けている。茗子も負けじと対峙したが、その真剣な表情と眼差しに、どんな  
怒りが募り始めた。さっき微かながら彼女に好意を持ちかけただけに、落差が  
激しい。

「だって……。1違和感があるんです」

やがて亜希さんは、茗子から目を逸らさないまま、口を開いた。

「違和感？」

意味がわからず、茗子はほとんどオウム返しで、聞き返した。

茗子の聞き返しに、2亜希さんはすぐには反応しなかった。ゆっくりと茗子  
から目を逸らし、「あの」と板前に話しかけた。

「私にも、お水を一杯もらえませんか」

板前は一瞬戸惑った顔をしたが、すぐに「ああ」と水を注ぎ始めた。

コップが三つ運ばれてきた。「はい」と板前はまず亜希さんの前に置き、「あ  
なたたちも」と、茗子、三津子さんの順で並べた。茗子が先にもらった水はも  
うなくなっていて、板前がコップを下げてくれた。「ありがとうございます」と

亜希さんがコップを持ち上げる。茗子と三津子さんは、会釈をした。  
水をぐいっと飲んだ後、「違和感があるんです」と、亜希さんがまた茗子を見  
た。

「私は三津子さんみたいに、気持ちを言葉にするのが上手くないので、ちゃん  
と説明できるかわからないですけど」

話が再開されるようで、茗子も再び亜希さんに顔を向ける。

「茗子さんが、迷惑って言ってしまったことを、悪かったって思ってるのは本  
当だと思うんです。でも、『悪い』の方向性が違う気がして」

意味がわからず、「方向性？」と、また茗子は間髪を容れずに聞き返した。

「はい。妊娠してる人に迷惑って言うのは良くないのに、言っちゃった。ミス  
をしたから謝った、反省したって感じに聞こえたんです。職場に妊娠中、育児  
中の人がいるのは迷惑、っていうのは、今でも思ってるんじゃないですか？

だって茗子さん、前野さんの件があつてから、妊娠する可能性がある人のこと  
は個別認識しないことにした、って言いましたよね。それって迷惑だから、仲  
良くなるつもりはないってことですよ」

あー、と背後から三津子さんの声がした。いつの間にか茗子は、体ごと完全  
に亜希さんの方を向いていたようだ。

「私もそこは気になった。新入社員さんのこと、妊娠希望があつて産休や育休  
について聞いてきたから、どうせすぐまた育休に入るって、溜息吐いてたよね。

茗子ちゃん、それを悪いことって思ってるんだなあ、って思ったわ」

亜希さんが大げさに首を上下させる。二人で連携されたようで、茗子はまた  
体温が上昇するのを感じた。「いや、だってそれは」と声が出る。

「だってチームメイトが次々妊娠して、育休に入って、戻ってきてても時短だっ  
たり休みが多かったりするから、私が仕事のフォロワーをしなきゃいけないって、  
もう何年もずっと大変なのは事実なんです」

また声が震えてしまった。

「それも疑問なんだよね。どうしてフォロワーは全部、茗子ちゃんがしなきゃい  
けないの？ 私もチームリーダーやったことあるけど、もっとみんなにも割り  
振った方がいいんじゃない？ 育児中の人が多くてみんなキャパオーバーなら、  
そもそも業務量と人員数が合っていないだと思ふ。人事や上司に掛け合った方  
がいいんじゃないかなあ」

三津子さんが言う。「私もそう思います」と、亜希さんが続いた。

「私はリーダーとかやったことないから、何がわかるって思われるかもしれないけど……でも、若子さんだけに負担がかかっているのは、おかしいですよ」

何がわかる、と若子は心の中で悪態を吐いた。掛け合ったことならある。リーダーになって数カ月経った頃、これはまったく回らないと思い、課長に人員を増やせないかと直談判した。しかし、「いやいや、それを回すのがリーダーだから。自覚持ってしっかりやってよ。もつと要領よくやらなきゃ」と一蹴された。要領がよくないことには自覚があるので反論できず、以来、他の人に割り振れない分は、すべて自分が引き受けるようになった。

「人が足りないなら、私を雇って欲しいです。首都圏に支店、ありませんか？ だって、若子さんは大変そうだから、こんなこと言うのはなんですけど、若子さんの会社、すごく優良ですよ。産休も育休も、生理休暇もちゃんと取れて。妊娠休暇ってのもあるんですよ。初めて聞いたけど、いいなあ。前野さん辞めちゃったなら、私が入りたい」

亜希さんが言う。え、と彼女に顔を向けた。

「私、妊娠したら会社をクビになったんです」

しっかりと目が合った状態で、そう言われた。「え、そうなの？」と三津子さんが声を上げる。

「派遣だったので、クビというか、雇い止めですけどね。でも五年も働いてたんです。ずっと正社員になりたいって希望を出してて、女性上司が上に掛け合ってくれて、やっと実現しそうだったんです。でも、それが妊娠したのと同時期で。そうしたら、正社員になるどころか、派遣としても切られました」

「そうなの？ 3 それって問題じゃない？ 出るどころ出た方が良かったんじゃない？」

「そう考えたこともあります。でも、妊娠は関係ない、契約を切っただけって言われそう。雇用について詳しいわけでもないから、妊娠中に聞える気もなかったし」

「確かに、妊娠中に心身にストレスはかけられないよね」

若子を挟んで二人が話す。その隙に若子は、亜希さんから視線を逸らした。だから彼女は、前野さんが辞めたことにこだわっていたのか。

「だから私、若子さんが妊娠する人はみんな迷惑って思っていることや、三津子さんのブログに、育児しながら働くことについて、攻撃的なことを沢山書いてたこと、4 流せないです」

さっき若子の声が震えていたのとは対照的に、亜希さんの声には力がみなぎっていた。

「うちは裕福じゃないから、私も働かないと子供を育てられせん。だから私、今就職活動中なんですけど、一歳の子供がいて、まだ保育園に入っていないって言うのと、面接までも行けないことが多いです。保育園は次の4月から入りたいって申し込んでるけど、うちの地域は激戦区なので、受からないかもしれないです。だって私、無職だから。仕事してる人が優先なんですよ。これ、どうしたらいいですか？ 私、何をどこから頑張ればいいんですか？」

亜希さんはどんどん早口になる。そつと様子を窺ってみたら、声はしつかりしているが、目に涙が浮かんでいた。また慌てて目を逸らす。

「私が今、若子さんの会社に面接に行ったら、一歳の子供がいるのか、じゃあまた制度とか利用して、いっぱい休むだろう、すぐ二人目を妊娠して、育休に入るかも、迷惑、要らない、って若子さんに言われますか？ 前野さんがそうだったから？」

ずずつと涙を吸音する音が聞こえた。バッグからハンカチを取り出す気配もした。涙を浮かべるだけでは済まなくなったのだろう。「亜希ちゃん、大丈夫？」と、三津子さんが若子の背中側から手を伸ばす。

「亜希ちゃんが言いたいののは、こういうことだよ。前野さんは確かに酷かったから、若子ちゃんが怒るのも無理はない。でも前野さんの問題の原因は、妊娠や出産じゃない。前野さん自身の問題。だから、一緒にして欲しくない、って」

「そうそう、そうです！ それが言いたかったんです！」

亜希さんが歓喜の声を上げる。

どこを見ていいかわからず、若子は握りしめたコップの中の水に視線を落とした。水がゆらゆらと揺れている。

若子が揺らしているようだった。頭がか、心がか、はたまた体なのかわからない。でも確実に、ゆらゆら、いや、ぐらぐらとしている。

三津子さんが、はあつと溜息を吐く音がした。

「私も5 同じこと、考えたことあるよ」

腕組みをして、口を開いた。

「私、妊娠中も通勤で毎日、満員電車に乗ったのね。でも、優先席の前に立つても、座ってる人、サラリーマンとか大学生とか、びつくりするぐらい席を譲ってくれないのよ。内部疾患があつて、実は優先対象って人もいるかもしれないけど、全員が全員ではないでしょう。だから不思議で仕方なくて、『妊婦』『優先席』『譲ってもらえない』とかで、ネット検索してみたんだよね。そうしたら、『妊婦に席を譲る必要はない』とか、『自分も絶対に譲ってやるもんか、って思

「『つて』とか書き込み合ってるサイトに行き着いて、もつとびっくりしたよ。子連れやベビーカーも迷惑、嫌い、とかも書いてあった」

「ええ、どうですか。酷い」

ハンカチを口に当てながら、亜希さんが訊ねた。

「前に妊婦に席を譲ってあげたら、お礼も言わずに当然でしょって顔して座られたから、それ以来譲らない、とか。気付かなかっただけなのに、ベビーカーで奥に行きたがってたママに、溜息吐かれながら、車輪を足にガンガン当てられたから、つてもあったかな。妊婦や子連れは偉そう、感じが悪い、優先されて当たり前だと思ってる。だから迷惑、嫌い、つて言ってる人が多かった」

「そんな。妊婦や子連れがみんな、そんな風なわけじゃないですか」

「そうなんだよね。実際にそういう妊婦や子連れがいたんだとしても、その人たちって、妊婦や子連れだから偉そう、感じが悪いんじゃないかって、もともと偉そうで感じが悪い人が、妊婦や子連れになっただけなんだと思うの」

「ああー！ そうですよ！ それ絶対そう！ さすが光さん！ じゃなくて、三津子さん。すごい！ 私の言いたいことを、ちゃんと言葉にしてくれる！」

まだ目尻が少し潤んではいるものの、亜希さんはすっきり笑顔で、声も明るくなっている。まるで憧れのアイドルを仰ぎ見るかのように、熱い視線を三津子さんに送っていた。

一方で茗子は、ぐらぐらが激しくなっていて、不安だった。自分の足許を確認する。きちんと両足ともステップに着いている。でも揺れている。キサラギだと名乗って、前野さんの事件の告白をした後の、揺蕩つてどこか心地よかったのとは、違う。今度は揺れに悪酔いしそうだった。

「前野さんも絶対にそうですよ！ だって彼女、実際に妊娠前から感じ悪かったじゃないですか。茗子さんは興味ないつて言ってるのに、ポイントが欲しいからって化粧品サイトの会員にしようとして、断ったら文句言うとか。仕事のフォローしてるのは茗子さんなのに、生理休暇はズル休みつて宣言したり」「うんうん。こんなこと言つて悪いけど、前野さん、茗子ちゃんのことを下に見てるよね。他の場所でも、同じことしてると思うよ。男の人や上の人には愛想良くして、自分で勝手に私より下、つて決めた人のことは、いいように使うとか」

「高校や大学に、そういう子、いましたね。私は関わらないようにしてたけど」二人の手許を窺った。両脇から二人が、自分の肩を揺らしているんじゃないかと思つたのだ。しかし二人とも、両手はカウンターの上面にあった。じゃあ茗子を揺するのは、この飛び交う声だろうか。耳を塞ぎたくなる。

「他のチームメイトさんは、どうなの？ 妊娠中、育児中の人が多いつて言っ

てたけど、みんなが前野さんみたいに酷いわけじゃないでしょ？」

「ですよ。妊娠中や育児中だったら、仕事量にはどうしても制限があると思ふけど。感じのいい人とか、茗子さんがフォローすることに、ちゃんと感謝してる人もいるんじゃないですか？」

両脇から質問をされて、え、と茗子は携帯に手を伸ばした。工房にいる時に会社からかかってきた電話と、ホテルの部屋で受信した森崎さんからのメールが、頭をよぎつたのだ。

いや、でも——と、手を引つ込める。揺らすのは止めて欲しい。そんなに簡単に流されたくない。

「茗子ちゃんも、属性で一括りにされて、嫌なこと言われたり、酷いことされたりしたことない？」

「女性みんなこう、つて思ってるような人も多いですよ。若い時は特に、ああ若い女子だからつて今、見下されたなあつて思うようなこと、多かつたです」

止めて欲しい。声で揺るのは、本当にもう。そう思う一方で、属性で一括りにされて——ということが、自分にもあつたのだろうか、思考も働いた。なくはない、気がする。いや、確実にあつた、と思う。

大学生の時、近所の運送会社で伝票整理のアルバイトをしようと、面接に行つた。初老の男性店長は、初めは「おお、真面目そうな子だ。いいねえ」と歓迎してくれたが、履歴書を渡すと、「え、あそこなの？」と茗子の大学名を見て顔をしかめた。「前におたくの大学の子を雇つたことあるけど、勤務態度が悪かつたんだよね」と、そのまま追い払われた。

結婚して、今住んでいる尚久の地元につ越してきたばかりの頃。尚久の中、高の友人たちが、居酒屋で小さな結婚祝いパーティーを開いてくれた。そこで男性の友人の一人に、「茗子ちゃん、出身どこ？」と聞かれ、答えると、「えっ、元カノと一緒にだ」と、嫌な顔をされた。「めちやくちやワガママで気が強い子でさ、俺もうあそこの人たちとは付き合えないわ、つて思つたんだよね。茗子ちゃんと尚久は、相性がいいんじゃないんだけど」とブツブツ言い捨て、その友人は茗子から離れた。

ぐらぐらぐら——。頭も心も体も、揺れる。二人が言いたいのは、6 ころいうことか。今の茗子は、あの失礼な店長や尚久の友人と同じだと——。まさか、そんな。

「亜希ちゃん若く見えるから、今でもありそうじゃない？ 女だからこうするべき、つていうのも、ほんと根強くなるよね」

「ありますね。結婚したから、とか、ママになったから、とかも多いですよ。

私の地元の友達も、同じ年なのは何でって思うんですけど、子供を保育園に入れるのかわいそうとか……」

(飛鳥井千砂『見つけたいのちの光。』『幻冬舎』より)

問1 傍線部1「違和感がある」とありますが、それはどういうことですか。その内容を説明する、次の文の「A」「B」にふさわしい内容をAは十五字以内、Bは十字以上二十字以内でそれぞれ書きなさい。

茗子は「A 十五字以内」ことについて謝ったが、それに対して亜希は、「B 十字以上二十字以内」ことについて謝るべきだとしている。

問2 傍線部2「亜希さんはすぐには反応しなかった」とありますが、それはなぜですか。その理由として最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 亜希は茗子が大きな声を上げて反発したのに対して、自分の気持ちを抑えられるかわからなかったから。

イ 亜希は怯むことなく、自分を見つめ返す茗子の気持ちを汲み取って話せそうになかったから。

ウ 亜希は茗子に一つ一つ丁寧に話すため、自分の考えを整理する時間が欲しかったから。

エ 亜希は自分の発言を茗子が繰り返したため、自分の言葉を受け入れるには時間がかかると思ったから。

問3 傍線部3「それって問題じゃない？」とありますが、「それ」とは何を指しますか。最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 妊娠したこと

イ 雇い止めに遭ったこと

ウ 妊娠は関係ないと言われたこと

エ 妊娠中にストレスをかけられたこと

オ 正社員への希望を受け入れられなかったこと

問4 傍線部4「流せない」と言ったのは、亜希がどういう状況に置かれているからですか。その内容としてふさわしくないものを次から二つ選び、記号

で答えなさい。

ア 亜希の家は経済的な余裕がないため母親の亜希も働かなければ子供を育てられないという状況。

イ 亜希が自分の育児における不満や憤りについて、三津子を通してしか言えないという状況。

ウ 亜希は息子が入園できていない中でも懸命に生きているのに、それを逆にする発言を茗子にブログで書かれている状況。

エ 亜希が若い女子という属性で一括りにされて、茗子に見下されている状況。オ 亜希は妊娠したため、正社員にもなれず派遣としての契約も切られたという状況。

問5 傍線部5「同じこと」とありますが、どういうことですか。「A」は本文中から六字で書き抜き、「B」は本文中から十五字以内で探し、最初の四字を書き抜きなさい。

「A 六字」だから問題があるのではなく、「B 十五字以内」が問題を起しているということ。

問6 傍線部6「こういうことか」とありますが、これまでの会話で茗子はどのようなことに気づきましたか。その内容としてふさわしくないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 茗子も属性で判断されて、嫌な思いをしてきたことがあったということ。

イ 茗子も相手にレッテルをはって、無自覚に酷いことをしてきたことがあったということ。

ウ 茗子も偏見を抱いている点では、かつて自分をそのように見てきた相手と変わらないということ。

エ 茗子も偏见的な思考を持っている点で、わずかながらあるということ。

二 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

私たちは、自分の行為が正しいか否かを判断するとき、何らかの道徳的な規範に従って思考する。たとえば私たちの多くは、人を殺してはいけない、という

規範が、道徳的に正しいと信じている。この規範が正しいのは、それが法律で定められているからではない。もしもこの世界に、殺人が法律で禁止されていない国があったとしても、私たちは人を殺してはいけないことを疑わないだろう。この意味において、道徳的な正しさは法律を超えたものののだ。

たとえば、次のような事態を想像してもらいたい。今まで殺人が法律で禁止されていたのに、ある日、突然それが許されたら、どうなるだろうか。当然、私たちは戸惑うだろう。そんな法律は道徳的に間違っている、と判断するだろう。そうした判断が可能なのは、私たちが思考の基準としているものが、法律よりも上位にあるからである。もしも判断の根拠が法律ではないなら、私たちは新しく変わった法律を批判することができない。なぜなら、その場合には、新しく変わった法律こそが、正しい判断の根拠になるからである。

しかし、ナチスドイツにおいて権力に服従した人々には、そうした思考が働いていなかった――アーレントはそのように考える。司法を介さない国家による虐殺など、それ以前には道徳的に許されない行為であるはずだった。しかし、一度それが法律で認められるや否や、人々は躊躇うことなくその行為に加担した。そのとき人々は、思考した結果として、虐殺が正しいと判断したわけではない。そうではなく、虐殺が正しいことであるか否かということ自体を、考えることさえしなかったのだ。だからこそそうした人々は、虐殺に加担することに対して無抵抗になってしまった。

アーレントはこうした出来事のうちに、道徳性の根本的な崩壊を「**アドウサツ**」する。

道徳性がたんなる習俗の集まりに崩壊してしまい、恣意的に変えることのできる慣例、習慣、約束ごとに堕してしまうのは、犯罪者の責任ではなく、ごく普通の人々の責任なのです。こうした普通の人々は、道徳的な基準が社会的にうけいれられている間は、それまで教え込まれてきたことを疑うことなく、考えもしなかったでしょう。この問題、この事実が提起する重要な事態は、ドイツの国民がナチスの教義を信じつづけたわけではないこと、わずかな期間の予告だけで、「歴史」がドイツの敗北を告げただけで、もとの道徳性にもどったことです。この問題はいまだに解決されていないのですし、わたしたちはこの事実に向直しなければならぬのです。

アーレントによれば、ナチスドイツにおいて、道徳性は単なる「習俗」、つまり権力者の都合によってコロコロと変えることのできる慣習に変わってしまった。しかし、前述の通り、権力は被支配者から服従されなければ存在できない。

だからそうした道徳性の崩壊の責任は、権力に服従した被支配者たち、つまり「ごく普通の人々」にあるのだ。

1 この問題は、ナチスドイツの解体によって解決されたわけではない。なぜなら、第二次世界大戦の終了とともに、人々はナチスドイツの価値体系から、「わずかな期間の予告」だけで、「もとの道徳性にもどった」からである。

そうであるとしたら、終戦後の民主主義的な価値観の回復もまた、人々の思考に基づいたものではない。おそらくそれも、思考の欠如によって、それが正しいか否かを考えることもなく、ただ周囲の人々への同調によって生じた出来事なのである。だからこそ、ただそれを素朴に安堵することはできない。民主主義的な価値観もまた、いつ放棄されるか分からないからである。

2 ユダヤ人の虐殺は人々の思考の欠如によって引き起こされた。しかし、ここで次のような疑問が生じるとしても不思議ではない。すなわち、そもそもナチスドイツは国民に対して自己責任を強調していたのではないか。そうであるとしたら、人々が思考することなく周囲に同調することなど、ありえないのではないか。

アーレントによれば、ナチスドイツにおいて、ユダヤ人の虐殺に加担することとは、国民の責任であると考えられていた。言い換えるなら、虐殺に加担しない者は、無責任であると見なされていた。彼女によれば、「個人の責任や道徳的な責任は、誰もが負うべき事柄であり、そこでどんな状況であろうと、どんな帰結をもたらそうと、仕事をつづけるほうが「責任をひきうけている」と主張された」のである。

ナチスドイツにおいては、虐殺に加担しないことは無責任だった。しかし、アーレントは同時に、そうした人々こそが「あえて自分の頭で判断しようとした唯一の人々だった」と評価する。つまりそうした人々は、周囲に同調するのではなく、自分自身が正しいと思えるか否かを思考していたのであり、その点で自らの行動に責任を負っていたのだ。そうした人々には自分の意見があり、自分の考えがあった。だからこそ、虐殺への加担に対して抵抗することができたのだ。

3 ここには責任をめぐる興味深い逆説が示されている。虐殺に加担しなかった人々は、自分自身の責任を引き受けるために、虐殺に加担することを拒否したが、それはナチスドイツにおいて、無責任な行動として非難された。つまり、ナチスドイツの基準に従うなら、それは自己責任に違背する行動だった。しかし、戦後、ナチスドイツが解体したあとの民主主義的な価値観のもとでは、むしろそうした人々こそが、責任ある行動をしたと評価される。

同じことを裏側から説明すれば、次のようになる。すなわち、ナチスドイツにおいて責任を果たしていたと見なされる人々は、結局のところ、自分で思考することを放棄した無責任な人間だった。少なくとも、戦後の民主主義的な価値観のもとでは、そうした評価は免れえない。

人々は、無責任でありながら自己責任を引き受けること、強い責任を引き受けることがありうる。筆者の考えでは、これは、決してナチスドイツだけに限った現象ではない。もしかしたら、自由主義における自己責任論もまた、同じような思考の欠如へと**b**陥っているかも知れない。

私たちの社会では自己責任論が蔓延している。しかし、その言説に従っている人々のいっただれだけ多くが、自己責任論の正しさについて、一度でも思考したことがあるだろう。もしかしたら、ほとんどの人は、そんなことは考えたことがなく、ただ周囲と同調して、なんとなく自己責任論者になっているのではないか。そして、自己責任を果たさないと見なされている人を、無責任だと言って非難しているのではないか。

アーレントの思想に従うなら、そのように周囲に同調して物事を判断すること自体が、無責任なのだ。思考することを放棄してその時代の自己責任論に同調することは、自分でも気づかない間に、大きな暴力に加担していることになるかも知れない。そしてそれは、もっと後の時代の視点からは、恐ろしい無責任さの発露として評価されるかも知れないのだ。

自己責任論に従うことは、無責任であることと両立する——ここに、強い責任が構造的に抱える問題が潜んでいるのである。

そもそも、思考するとはどういうことだろうか。

アーレントは、思考を数学的な計算から区別する。計算は、一つの問いに対して、必ず決まった一つの答えを導き出す。問いと答えの間にあるのは、証明の過程でしかない。計算するということは、そうした過程を正確に辿ることに他ならないのだ。

しかし、思考するということは、そうした決まりきった過程を辿ることではない。むしろそれは、答えのない問いについて、あてもない、こうでもない、様々な角度から吟味することである。つまり思考は、一つの視点ではなく、複数の視点から考える営みなのである。

そうした視点の複数性を、アーレントは対話という行為を手がかりに説明している。彼女にとって思考は、複数の視点から物事を吟味するということであり、それは言い換えるなら、「わたしと自己とが沈黙のうちで交わす対話」と呼ばれるべきものである。

平たく言えば、それは自問自答の営みに他ならない。もっとも、思考を自己との対話として捉える発想自体は、必ずしもアーレントの**c**ドクソウではない。少なくとも同様の考え方の起源は、古代ギリシャにまで遡ることができ。自己と対話する、ということは、「私」が自分自身と何らかの形で関係する、ということの意味する。ではその「関係」は一体何だろうか。興味深いことに、古代ギリシャにおいて、それは4友情として説明されていた。つまり、物事を多様な角度から吟味する思考は、友達と対話するときのように、「私」が自分自身と対話することで成し遂げられるのである。アーレントもまた、そうした発想を継承している。

思考するということは、まるで友達と接するかのようになり、自分と対話することである——そうであるとしたら、思考の質は、それ以前に交わされた友達との対話の経験に左右されることになる。そうした対話の豊かさが、思考の深さを条件づけることになるのだ。(略)

思考の「道しるべ」は「友情」の経験である。友達との対話の経験がまずあって、その経験を頼りにして、私たちは自分自身とも対話することができる。この順番は逆ではない。そしてこのことが意味しているのは、もしも友達との豊かな対話の経験がなければ、私たちは物事を深く思考し、批判的に吟味することもできなくなってしまう、ということだ。

ここから次のような仮説を立てることができる。なぜ、ナチスドイツにおいて、多くの人々は思考することなく、虐殺に加担してしまったのか。それは、そうした人々から、思考の条件であるところの友情が奪われていたからではないだろうか。つまり、強い責任が人々を孤立化させ、他者との関係から切断していたからではないだろうか。

前述の通り、ナチスドイツは住民からの密告によってユダヤ人の虐殺を推進した。それは、公的な警察組織だけではなく、自分以外の住民もまた、警察として機能するという事態を意味する。このような事態は、人々の間に深刻な疑心暗鬼を蔓延させ、常に、自分が密告されるかも知れないという不安を喚起する。そうした不安は、それまで築かれていた友情関係を破壊させる力を持っていたのである。(略)

たとえば「私」の街にユダヤ人の友達が住んでいるとする。この状況そのものが、ナチスドイツにおいて極めて危険なのである。もしも「私」が密告する前に、その友達が誰かに密告されれば、警察の取り調べによって、友達は「私」との関係が暴露されるかも知れない。すると、「私」はユダヤ人と協力していた者として、政治思想犯として、家族もろとも逮捕されるかも知れない。そうした事態を回避するための唯一の手段は、「私」が自分からその友達を密告すること

である。それが合理的な行動なのだ。

ナチスドイツにおいて、誰かと友達になることは、そもそもリスクでしかない。その友達から密告されるかも知れないし、その友達が逮捕されれば、自分も逮捕されるかも知れない。そして、そうした事態を回避するために、自分からその友達を裏切らなければなくなるかも知れない。それくらいなら、最初から誰とも友達にならない方がいい。交友関係を結ぶことも、維持することも避けた方がいい。そもそも友達を作らないことこそが、もっとも合理的な行動なのだ。そのようにして、ナチスドイツの支配体制は、人々から友情を根本的に奪い去ってしまったのである。

(戸谷洋志『生きることは頼ること』『自己責任』から「弱い責任」へ』(講談社)より)

問1 傍線部 a・c のカタカナを漢字に直しなさい。また、傍線部 b の読みをひらがなで記しなさい。

問2 傍線部 1 「この問題は、ナチスドイツの解体によって解決されたわけではない」とありますが、それはなぜですか。その理由として最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア ナチスドイツにおける虐殺と終戦後の民主主義的な価値観の回復とは、ともに道徳的な規準の変化から生じ、人々が正しいと判断した結果であるから。
- イ 終戦後に回復した民主主義的な価値観は、人々が無批判に同調したことによって生じたナチス時代のドイツと同じであり、すぐに変わる可能性があるから。
- ウ ナチスドイツの価値観に比べて終戦後の民主主義的な価値観は、短期間のうちに受け入れられたものであり、人々の道徳に合わない可能性があるため。
- エ 戦後の民主主義的な価値観の回復は、人々の熟慮を経たものではないため、人々の同調を得られる可能性が低いから。
- オ 戦後の民主主義的な価値観が速やかに回復したにもかかわらず、ナチス時代のドイツの価値観もいまだに人々の同調を得ているから。

問3 傍線部 2 「ユダヤ人の虐殺は人々の思考の欠如によって引き起こされた」とありますが、「思考の欠如」にもなっている物事としてふさわしくないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 権力への服従
- イ 付和雷同
- ウ 他者との交流
- エ 疑心暗鬼
- オ 道徳性の崩壊

問4 傍線部 3 「ここには責任をめぐる興味深い逆説が示されている」とありますが、ここでの「逆説」はどのようなことですか。その説明として最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア ナチスドイツでは自己責任が強調されていたにもかかわらず、無責任な国民が多く存在したこと。
- イ ナチスドイツにおいて責任を果たすということが、虐殺を行うことであつたということ。
- ウ ナチスドイツにおいて虐殺に関わった人々が、実は法律を守る道徳心を持った人間であつたこと。
- エ ナチスドイツにおいて無責任と非難された人々が、自分で考えて責任ある行動をしていたということ。
- オ ナチスドイツにおいて虐殺を行った人々が、戦後には民主主義的な価値観を持つようになったこと。

問5 傍線部 4 「友情」を通して、どのような思考が可能になりますか。その思考に至る過程を踏まえて、次の文に合うように四十五字以上五十字以内で説明しなさい。

「四十五字以上五十字以内」ことができるようになる。

問6 本文の内容と合致するものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 一般的に道徳的な正しさは法律よりも上位にあるが、ナチスドイツでは道徳が習俗に随とされたため、人々は権力者に服従するようになった。
- イ ナチスドイツ政権下で、その教義を信じなかった国民がいた理由は、現在でも解明されていない。
- ウ 法律に従うことは道徳的に正しいことであり、人々は法律を基準に合理的な行動ができる。
- エ 現代の自己責任論に同調している人々は、大きな暴力に加担している可能性がある。
- オ ナチスドイツでは交友関係を結ばないことが当然と考えられ、人々の密告が盛んに行われて、警察は機能しなくなった。



